

2. SWY29 の IDI (Intercultural Development Inventory) 調査

IDI は 50 問からなる「文化的他者」についての考え方の調査 (inventory) であり、有料のオンライン調査である。5 段階のリッカート尺度 (「全く同意できない」、から、「非常に同意できる」、まで) で異文化に対する質問に回答してもらう。結果は個人、グループともオンライン上で作成されるが、IDI の試験コードを入手したり、結果を分析して受験者に説明するためには、アメリカでワークショップを経て試験を受けた IDI Administrator という資格が必要である (筆者は有資格者である)。今回はプログラム前後とも最終参加人数 118 名全員の回答があったので、事業前後での比較分析を試みた。IDI 調査で何がわかるかを少し説明する。

多くの場合、受験者はある文化にとって、マイノリティ (留学生、移住者等) あるいは、マジョリティ (その文化の人—日本にいる日本人で外国人と接する仕事をする人) などである。つまり、自分の国であろうが、留学や仕事先であろうが、構成されている社会に住んでいるとき、地理的文化があるのが一般である。世界船のように、社会に根差した文化が存在しない状態では、個人が文化の代表となる。しかし、その個人自身が単文化の価値観を持っているとは限らない。長いこと国外に住んでいたり、特殊な教育を受けてきたかもしれない。そのために、参加青年が他者の価値観が彼の持つパスポート国の典型的な文化 (もしそのようなものがあるとしても) 由来ものなのか、そうでないのかを判断するのは難しいこともある。郷に入れば郷に従えの「郷」、あるいは日本であれば、「普通」がないのである。つまり、帰国後の IDI は、受験者が乗船中に起こった様々な状況や人間関係についての考えや行動を異文化経験として答えることになる。つまり帰国後の IDI の結果は社会の当たり前に依存しない、自分の「善かれ」との思い、行動、真の自分の状況判断力が多文化、多様性に満ちた環境でどのように機能したか、を知る手助けになる。分析は、まず、全体の傾向を説明してから、前章で説明した、各項目の特筆すべき点を述べる。

2-1 全体 (PO と DO の分析)

全体の傾向は次ページにある、「Perceived Orientation (PO)—認知度」と、「Developmental Orientation (DO)—発達度」に分けられる。「Perceived Orientation (PO)—認知度」は、異文化に対する理解、意識を表す。いわゆる、異文化への関わり方に対する自分の「理想」である。その下の「Developmental Orientation (DO)—発達度」は、回答者の異文化との実際の関わり方、すなわち「現実」である。また、それぞれの値のレンジは 55~145 であり、100 未満が前章で説明した、mono-cultural orientation, 100 以上が intercultural orientation の領域である。簡単に言うと、DO が 100 以上になることが望ましい。一般的に研究でグループの特性が示されるときには以下の様に示された色付きのバーの長さで変化が一目瞭然であるように示される。DO のポイントは PO よりも低い。理想と現実のギャップである。

Fig. 1 出航前

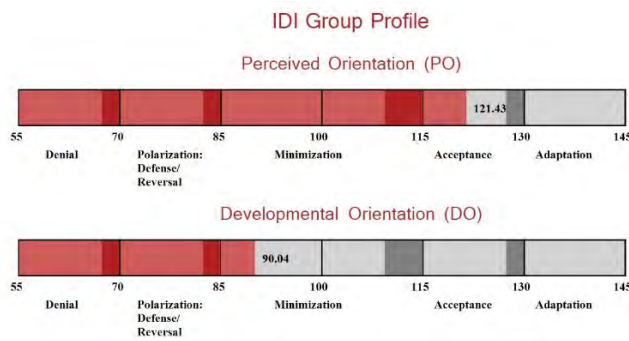


Fig. 2 帰国後

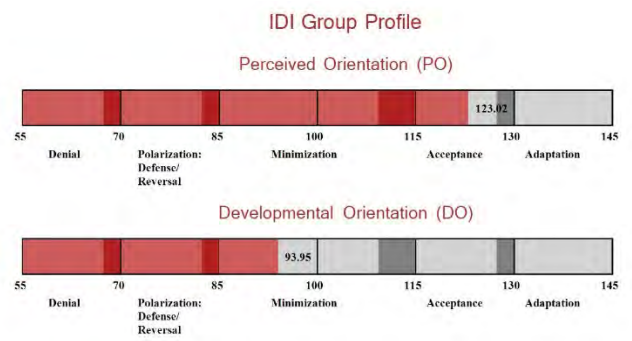


Fig. 1、Fig.2 から、出航前の測定では PO（理想）の平均は 121.43 であり、この値は「理想」が intercultural orientation である、**(9)Acceptance** であることを示し、その態度は事業後には 123.02 とわずかに上昇した。また、出航前から PO が 100 以下の参加青年はいないため、全員の理想として「異なった考えを受け入れる」用意はできている。実際値、つまり「現実」をこの「理想」値にいかにか近づけるか、が課題である。SWY29 の日本参加青年の DO（現実）の平均値は事業前は 90.04 であったが、事業後には 93.95 と変化した。つまり、大まかにいえば、「理想」は Acceptance であるが、「現実」は Minimization に依存していることが分かる。また、DO 値の変化は異文化環境での自分の実行力を測定するものであるために、より重要である。

さて、事業前、事業後の SWY29 の DO の値は Minimization (90.12 から 93.92) であるが、徳島大学の例（坂田ら、2008）によると、1 カ月のアメリカでの語学研修後の日本の大学生の DO の変化は Polarization (75.92 から 80.11) に留まり、岩手大学（吉原ら、2012）の様にアメリカや韓国への研修を含む 1 年間の「国際文化理解演習」ののちの DO の変化も Polarization (82.23 から 84.04) であることから、日本の一般的な学生の値と比較すると、SWY の参加者は元々異文化感受性が高いものであると思われ、全体的には乗船中の活動によってその成長を促進させているようである。また、SWY29 の DO 平均値が +3.91 変化した、という変化値は、アメリカの留学プログラムの研究結果（Vande Berg, Paige, & Lou, 2012: 345）と比較しても、アメリカの大学に留学している 大学院生の同値の大体 2 年分の経験 に相当する。さらに、SWY プログラムの参加者は、一つの国に留学に行くのに比べ、地理的対象文化がないという複雑な異文化環境を経験している。つまり、アメリカに留学するのであれば、アメリカ文化を念頭に置いた文化経験であろうが、船にはそのような target culture (地理的対象文化) はなく、多様な背景を持った参加者で構成されているので、互いが様々な「当たり前」を主張しあう環境である。したがって、この +3.91 という変化値は価値があるものであり、称賛に値する。以上が今回の出航前と帰国後と比較したグループの概観である。

2-1-1 全体（POとDOの分析） - 標準偏差

ここでもう一度、理想（PO）と現実（DO）の値を表（Table 1-1）にしてみたい。一般的にはグループの概観のみの評価を行う IDI であるが、実は、細かい分析を始めると、特に DO の標準偏差（Standard Deviation-SD）が非常に大きいことに気が付く。つまり、ばらつきが非常に大きいのである。

Table 1 理想と現実

	PO, DOともに最小値 55 最大値 145	出航前 (range 55-145)		帰国後 (range 55-145)		出航前—帰 国後 差	最大 増加値	最大 減少値
		Mean Score	SD	Mean Score	SD			
理 想	Perceived Orientation (PO)	121.43	5.40	123.02	6.02	1.54	+21.9	-15.75
現 実	Developmental Orientation (DO)	90.04	13.30	93.95	14.41	3.91	+51.2	-46.6

出航前の SD は 13.30、帰国後に及んでは 14.41 である。DO は実際の異文化対応力が反映される値であるので、DO 値に注目すると、最大に値が伸びた参加青年は出航前と帰国後の差が+51.2 であり、反対に-46.6 下がった参加青年もいる¹。最小値 55、最大値 145 の PO 値や DO 値中でのこれだけの増減の差、ばらつき、差の大きさは異文化感受性向上のためのトレーニングを全体に対して行っていないプログラムとしては普通なのかもしれないが、大きく値を下げている参加青年達がいることを考えると、しっかりとした事前トレーニングを含めた異文化感受性向上のためのトレーニング（guided training）を行う必要がある。このトレーニングで減少値の最小化、及び、減少する参加青年の数を減らせると考えられる。そうすれば、全体平均もさらに上がると期待される。そして、トレーニングは日本人青年に対してだけでは片手落ちである。「相手」があつての異文化環境であり、世界船の共通認識を持って臨むべきである。

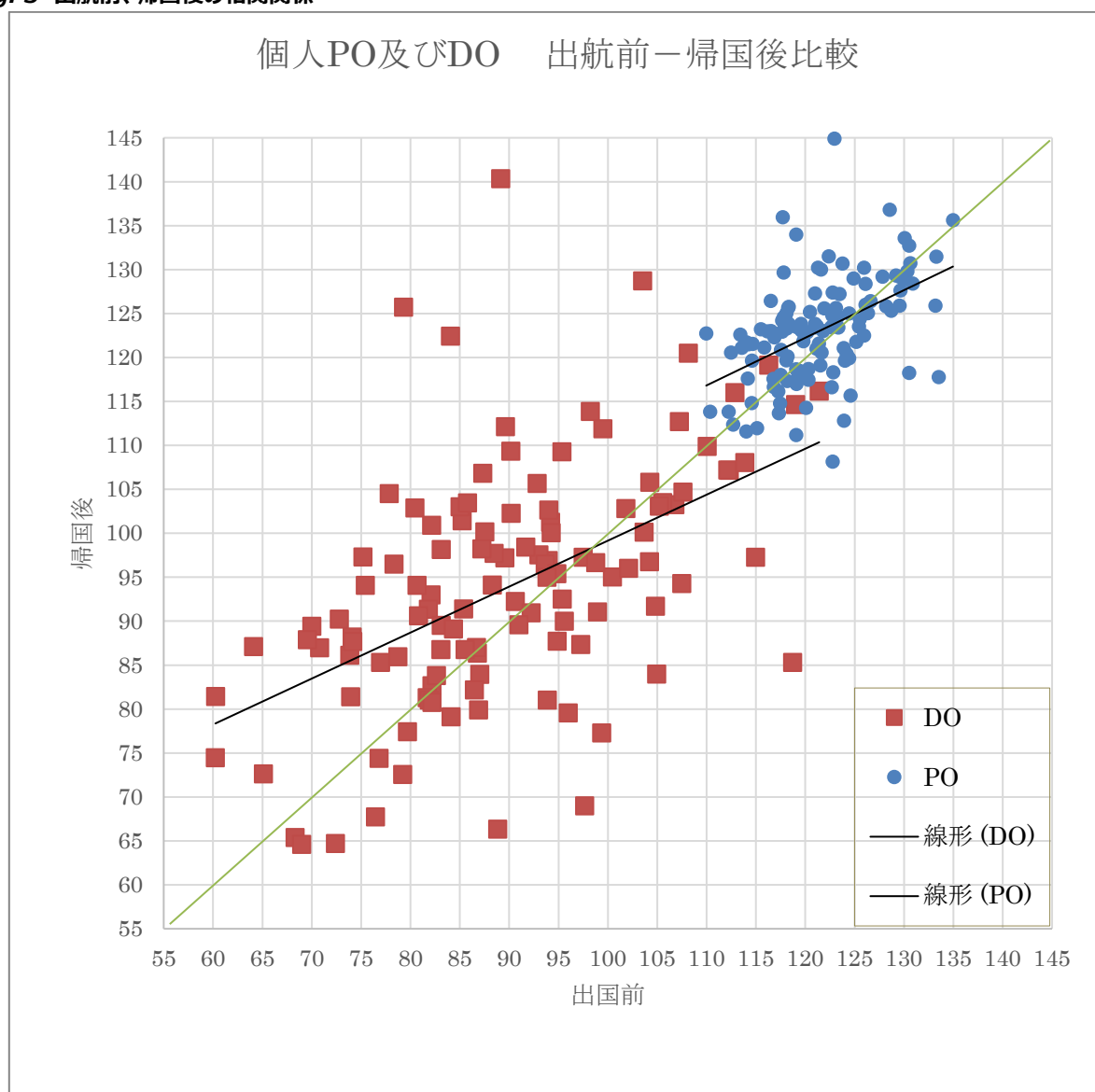
2-1-2 全体（POとDOの分析） - 出国前 帰国後の相関

出航前と帰国後の PO と DO の相関図を作ればばらつきを見る。（Fig. 3）。PO は $r=0.487$ 、DO も $r=0.483$ で弱い相関がある。つまり、PO、DO とともに、高い値の参加青年が帰国後に値が突然低くなったり、その逆になったり、ということはない、ということである。PO は理想値なので、増減やばらつきは DO と比べて少ない。DO は実際値なので、参加青年個人の経験の違いがグラフ中の点のばらつきの大きさとわかる。つまり、船の中での同じような環境から、参加青年個人が様々な経験をし、その経験から感じ取ったこと、考えたことが各々異なっている、ということである。インタビューでどのようなことが起こり、どう考え、どのように行動したかなどを個別に知る必要がある。Fig. 3 を斜めに分割する緑の線は $x = y$ 、つまり、プログラムの前後で値が変わらなければこの線の上に結果が表れる。緑の線より上であれば、結果が出国前より帰国後の方が「伸びている」ことを

¹ 詳しくは Excel データ、「SWY29 pre-post 比較比較データ.xlsx」内「DO PO 伸び及び相関 118」タブをご覧ください。

表す。多くの値が緑の線の上方にあるが、下方にある値も多くある。これが全て上方に移動すれば理想的であるのだが。

Fig. 3 出航前、帰国後の相関関係



PO 出航前・帰国後相関	$r=0.487$	弱い正の相関
DO 出航前・帰国後相関	$r=0.483$	弱い正の相関

2-1-3 全体（POとDOの分析） - 増減値

実際にはどれくらいの数値が増減したのか。Table 1 では最大の差の値のみを表したので、出航前と帰国後と比較した PO 値の増減、および DO 値の増減を人数で見ることにする。以下の Table 2 から、118 名中 PO（理想）値が増加したのは 70 名（約 60%）、反対に減少は 48 名である。理想値が減少することについては、のちに分析する。

Table 2 PO (理想) 値の増減	人数	118 名中(%)	平均伸び値	平均伸び %
PO 値が増加した	70	59.3%	5.09	7.27%
PO 値が減少した	48	40.7%	-3.52	-7.33%

これに対して、次の Table 3 から実際の値、DO が伸びたものは全体の 58% の 69 名であり、伸びた参加青年の平均伸び値は 12.52 であり、大変に大きい。伸びた参加青年の平均伸び率 (%) は 18.51% である。しかし、DO が減少した参加者が 49 名 いることから、思うように自分の多文化での活動が思うようにいかなかった（乗船前の経験ではできていたことが乗船中にはできなかつたり、自分ではコントロールできないと思った事態に遭遇したり）ということである。

Table 3 DO (現実) 値の増減	人数	118 名中(%)	平均伸び値	伸び %
DO 値が増加した	69	58.0%	12.52	18.15%
DO 値が減少した	49	41.2%	-8.23	-16.79%

これには様々な理由が推測される。国内外の参加青年との人間関係かもしれないし（非常に多様な人々が密に接する環境では、同国人に対しても「我々」対「彼ら」という構造はでき、外国人青年に近い考えをもつ日本人青年が外国人青年の考えを「我々の考え」とし、合わない日本人青年を「彼ら」することもある - Reverse 値が低くなる）、委員会で思うようにグループが動かなかったかもしれない。それをどうとらえるか、が多様性を紡ぐ際に重要になってくる。ばらつきが大きいデータでのこのような伸び値なのだから、インタビューで彼らの経験を知ることが必須となる。

2-1-4 全体 (PO と DO の分析) - Acceptance (100) 以上

次に、Table 4 では、Acceptance (DO 100 以上)の値を見える。PO (理想値) においては、全員が出航前から 100 以上であったために、DO (現実値) のみの考察である。DO が 100 以上であったものは出航前は 26 名であったが、39 名に増加した。全体に対する伸び率は 11.20% である。

Table 4 DO (現実) "Acceptance (100)" 以上の人数

	DO before	118 名中(%)	DO after	118 名中(%)	伸び率%
100 以上 (人数)	26	21.85%	39	33.05%	11.20%
100 以下 (人数)	92	78.15%	79	67.80%	

また、出航前は DO 100 未満 (Acceptance に届かない) でいたが、下船後の調査では 100 以上になったものは 21 名

であり（Table 5）、これは全体の 17%である。Minimization（100 未満）と Acceptance（100 以上）の間の壁は他のステージ間の壁よりも乗り越えることが困難だと言われるので、特別な guided training なしで、DO が 100 以上になることは高く評価されるので、この 21 名にはどのような経験があったのかを調査したい。

Table 5 DO 出航前 100 未満かつ 帰国後 100 以上

21 名	17%
------	------------

2-1-5 全体（PO と DO の分析） - 年齢と PO, DO 値の関係

また、最後に年齢と PO, DO との相関（Table 6）も調査したが、年齢が大きくなればある傾向が見られる、というような結論は出せない。数字からは 19 歳、20 歳及び、27 歳、28 歳の DO の伸びが大きい。また、26 歳の DO 値の減少が高い、と読める。しかし、サンプル数が少ないことから、これは年齢に関係するものではなく、参加者個人の特性である可能性が強い。また、表最後に見られるように NL たちの伸びも大きい。他国の NL たちもマネージしなければならなかった彼らは、乗船前から様々な異文化マネージメントを経験してきたであろうが、SWY の経験は彼らをさらに進化させたことがわかる。

Table 6 年齢と PO, DO との関係

age	人数 (計 118)	PO (理想) 年齢平均	PO 差 年齢 平均	DO (実際) 年齢平均	DO 差 年齢 平均
18	5	120.17	-0.12	86.59	0.40
19	20	123.56	2.29	95.60	5.59
20	19	122.67	3.04	93.68	7.63
21	20	123.30	0.20	94.43	-0.14
22	10	124.21	0.35	96.29	1.32
23	5	121.19	0.63	88.10	1.37
24	7	120.12	1.28	89.34	1.93
25	4	126.72	1.28	97.52	2.83
26	4	117.19	-5.84	79.93	-14.30
27	6	122.61	2.93	92.55	6.95
28	8	127.05	4.18	103.53	10.08
29	7	120.69	-0.06	88.72	-0.40
30	2	116.38	-1.10	79.64	-1.51
NL	2	137.44	15.17	123.58	35.35

以上をまとめると、全体の平均値から算出された DO の伸びの値は SWY が短期プログラムであり、かつ、異文化感受性向上のための guided training を行わなかった割には良いといえよう。しかし、値のばらつきが大きく、大きく伸びた参加青年もいれば、大きく値を減少させた参加青年もいる。これは個人がその経験のプロセスを理解するための guided learning が行われていない、という SWY プログラムの特色を表わす。

次に、IDC の各ステージに基づいた、すこし細かな分析をプログラムの傾向として行う。繰り返すが、ばらつきが大きい中でのこの値であるから、以下のコメントが個々の参加青年すべてに当てはまるわけではない。しかし、グループの傾向としての分析である。

2-2 IDI ステージ別分析

Table 7 は出航前、帰国後の比較をさらにステージ別に表にしたものである。表左にある番号は前章で説明した IDC の項目と番号である。その上の番号がない 2 つの項目が全項で分析したの全体の値の傾向を表す。(1) から(13)まで、各項目の最大値は 5 であり、Hammer ら (2002)によると、4 以上の値があれば、その項目(ステージ)は「解決した」(Hammer & Bennett, 2002)と、説明されている。あと一息の 3.9 以上の項目に色をつけた。

Table 7 出航前 帰国後 比較

	n=118	出航前		帰国後		差
		Mean Score	Standard Deviation	Mean Score	Standard Deviation	
理想	Perceived Orientation (PO) (range 55-145)	121.43	5.4	123.02	6.02	1.59
現実	Developmental Orientation (DO) (range 55-145)	90.04	13.29	93.95	14.41	3.91
(1)	Denial	3.96	0.42	4.14	0.50	0.18
(2)	Disinterest Cluster	3.59	0.54	3.75	0.62	0.16
(3)	Avoidance Cluster	4.44	0.54	4.66	0.55	0.22
(4)	Defense	3.71	0.67	4.02	0.55	0.31
(5)	Reversal	3.5	0.55	3.56	0.59	0.06
(6)	Minimization	2.99	0.67	2.94	0.71	-0.05
(7)	Similarity Cluster	2.79	0.78	2.59	0.91	-0.2
(8)	Universalism Cluster	3.24	0.76	3.38	0.76	0.14
(9)	Acceptance	3.82	0.73	3.93	0.61	0.11
(10)	Adaptation	3.59	0.63	3.72	0.62	0.13
(11)	Cognitive Frameshifting Cluster	3.46	0.75	3.82	0.71	0.36
(12)	Behavioral Code shifting Cluster	3.69	0.64	3.64	0.70	-0.05
(13)	Cultural Disengagement	3.67	0.66	3.70	0.70	0.03

Table 7 の(1) から(13)の項目の概要は 1 章で説明した。それぞれの Mean Score は中央値、最低 0 で最高 5 である。4 以上の数字であれば、その項目に対しては問題はない。つまり目指すは 4 以上である。概観すると、各項目で 4 以上になった項目が少ない。Table 7 の最右列は出航前と帰国後の「値の差」をあらわすのだが、(6) Minimization、特に(7) Similarity cluster と Adaptation の(13)Behavioral code shifting 以外はすべてプラスの変化がみられる。また、(1)Denial とそのクラスターである (3) Avoidance のステージ、また (4) Defense、(9) Acceptance は 4 ポイント

以上、または 4 ポイントに近い。4 ポイントを超えることが良いとされているために、これらは価値のある値である。以下、ステージごとの分析を出航前と帰国後と比較しながら行う。

(1) Denial 値が上がった、ということは、青年たちは、表面的な違いではなく、多様な人々にはそれぞれの異なった価値観があることを理解していることをあらわす。違いの認識である。例えば、「イスラム教の人たちに友達がなくて、怖い イメージ だったけど、実は優しく、面白い人たちが多かった」という、文化的他者に持つ不確かなイメージ、及びステレオタイプからの脱却である。また、このプログラムに特有であるが、(3) Avoidance cluster が乗船前から高い値であったが、下船後さらに高くなった。これは異なった考え方、やり方を 避けない という態度である。色々と興味をもって異なったやり方に取り組もうという姿勢が見られる。しかし (2) Disinterest が解決していない、ということは、依然として表面上の違い以上の、たとえば相手もつ価値等や考え方の理由までは興味を持っていない(違いは認識したが、興味があるわけではない)参加青年が相当数いる、ということである。これは、トレーニングをしないと解決しない問題である。

(4) Defense が下船後解決した (4 以上になった) ことから、違うやり方、異なった考え方はいけないものである、という態度ではなくなっている。相手に対する敵対心や相手を低く見るというはない。しかし、(5) Reversal が解決していないことから、日本の考え方よりも、他の文化の考え方のほうがいい、という考え方からは解決していない。(5) Reversal が解決しないのは、他の文化、および多文化の人々の中で、「日本では経験しないような形で自分らしさを認められた」、「日本にはない良い考え方を経験して、それに傾倒した」というような大きな感動を経験した時、に起こることが多い。他者を、そして多様性を丸ごと受けいれよう、という SWY ならではの環境において、実社会で息苦しさを感じている日本人青年はこの値が下船後下がったり、4 以上にならないことが多い。しかしながら Defense も Reversal も、文化的経験を分析する認知的複雑性がある状態ではないことを忘れてはいけない。

(6) Minimization の値はばらつきは大きい、2.99 から 2.94 と事業後の値が若干下がった。また、全てのカテゴリー中、一番低い平均値である。特に (7) Similarity Cluster の値が下がっているということは、原則的には違いを楽しんでいるものの、実際には「人は結局は同じ」と感じる経験が多かった、そこにフォーカスしたのではなかったかと推測される。国際交流のプログラム、すなわち異文化の人たちとの友好関係を促進するプログラムでは Minimization のポイントが上がらないのは特有の状態である。友達を作る、ということの第 1 歩は、良く知らない相手との 共通点 を見出すことから始まる。Minimization が下がることの理由、及び、Minimization の弱点は別項で述べる。

(9) Acceptance の値が (Minimization の値は下がっているにもかかわらず) 上がっている。つまり、いろいろな考えを受け入れる許容は広がっていることを示す。他の文化のやり方を良いとか悪いとか言っていないで、とり合えず受け入れなければならない場面、避けられない場面が多い。また、異文化を楽しむために参加したのだし、たくさん新しいことにトライしたのだろう。一緒に生活し、文化の違いを受容し、多様性を楽しんだのだと思う。だから、Acceptance 値が上昇したのであろう。

(10) Adaptation 値も 4 には届かないものの、上昇した。特に、相手の考え方に自分の考え方をシフトしてみる、という (11) Cognitive Frameshifting Cluster の値が伸びた。世界船は多文化、多様性をもった参加者が一緒に暮らすプログラムであるので、相手の立場に立って考えなければいけない場面もたくさんあったのだろう。しかし、(12) Behavioral Code shifting Cluster は若干下がっていることから、いろいろやってみたけど、できないこともある（例えば、昔の留学先ではもっと現地の人たちのようなことをしようしたり、できたが、船の中の多様なやり方では自分がやりたくないことも多かった）、と感じたのかもしれない。そのうえで、いろいろと受け入れてみるけれど（Acceptance 値上昇）、やっぱりみんな同じ方がやりやすい（Minimization 値低下）ということなのかもしれない。しかし、繰り返すが、ばらつきが大きいデータなので、個人へのインタビューを行って、経験を調査する必要がある。

最後の(13) Cultural Disengagement は「どこの文化ともつながっていない感じ（所属感がない）」を表す。一つには自分の価値がどのように、社会の影響を受けて形作られてきたか（たとえば「普通～」という表現の「普通」が世界共通のものなのか、どこから来たのか、どのような社会的価値があるのか、普遍的な価値なのか？（多くの場合違うのだが））を客観的に説明できず、しかも自分の文化に愛着を感じていない、あるいは、自分の人生は世界中を転々としていて、社会的価値志向を理解するほど定住したことがない、というような場合には、この値は低くなる。この値が低い日本人青年はどのような文化背景があるのか興味深い。

2-2-1 Minimization が下がることの理由、及び、Minimization の弱点

Acceptance が高い値なのに、なぜ Minimization がそんなに低いのであろうか。先にも述べたように、Minimization とは、「我々」対「彼ら」の抗争を越えて、共通の部分を見出し、違いを最小化する、という、一見すると平和なステージである。また、Acceptance が高くても、Minimization が低い、という場合が良くある。これは Minimization が trailing orientation となっていると言われる。trailing とは「引きずる」という意味だが、「弱点」と解釈してよいだろう。trailing orientation があると、長所の Acceptance がフルに発揮できないのである。Minimization が低くなる理由としては、

- 特に世界船のプログラムでは、共通のミッション（How to make the world a better place?）をシェアしあう、世界からの優秀な若者の集まりであろうから、共通点が多いのかもしれない（貧富の差や、社会階級の差などを感じることはとても少ない）。そのような SWY 文化に対する自己同一性、あるいは孤立からの脱却。日本にいと、自分が出る杭なのに、ここでは違う、安心だ、という感覚を持つ。
- 多様な混沌とした世界船の環境の中で、未知の文化に接して、人として共通点を見出す。つまり、日本人青年にとって全くなじみがなく、友達になることを想像さえしなかった外国参加青年と、同じジョークで笑って「あ、結局人は同じなんだな」と「理解」した経験が多々あった、という参加青年も多くいるのではないだろうか。

- 実際に作業をするときに、やり方の違う外国参加青年に説明をしても分かってもらえなかったり、英語が通じなくて、もがいたことも多かったのではないだろうか。その結果「自分を分かってくれる人」「日本のやり方を尊重してくれる人」（自分の価値観が中心であって、それに近寄ってくる人たち）と多くの時間をすごしたのではなかっただろうか。
- また、Acceptance 値は伸びて、Minimization 値が下がった状況を分析すると、日本特有の協調性があることへの美德 所以なのかもしれない。喧嘩したくないので取りあえずなんでも accept しておく、という感じがあったのかもしれない。しかし、Minimization が低い状態では、いずれ爆発してしまう。「本当は一緒に考え方がいければ (minimization)、我慢してあなたの考え方を受け入れます、喧嘩したくないもの(acceptance)。でもあなたの考え方の理由がわからないので、辛いです。」という状態だったのではないか。
- 以前の経験から、Minimization を至上とするリーダーや、考え方を持つ友人との交友関係が影響していて、船の中でもその考えを使って物事を判断する。いかに「違いを最小化するか」に心を砕く教員、リーダーのもとで教育を受けたり、仕事をしたり、親友が Minimization 命であると、それが正しいこととなり、自分も違いをなくすことを正しいことだと思いつ込む。異なった意見の特性を抽出してみたり、違いから新たなものを生み出すことは不必要であったり、面倒くさいこととなる。留学先でも、留学生同士が喧嘩をする（Defense である）とこまるので、Minimization を高めるワークショップをすることがある。

このように Minimization は違いを最小化するところに価値の中心をおいているため、落ち着くので実に心地の良い状況なのである。それでは何が問題なのか。Minimization の弱点はその心地良さにある。

- ◇ 弱点の一つは、心地良くなると敢えてリスクを冒して環境を変えてみようとは思わないのではないか。つまり、価値観の違う人と距離を置くようになり、なぜ異なっているのかを知ろうと思わず、まして、他のやり方でやってみようと思わなくなるという危険性がある。多様性の受け入れ、取り入れ、考え方を変えてみるのが億劫になる。次のさらなるステージに進めなくなる。
- ◇ 二つ目には、共通性にフォーカスするあまり、違いやユニークな考えに盲目的な状態である。Minimization からは、イノベーションは生み出せないのである。もちろん、SWY の参加者は共通のミッションをもった参加者の集まりである。しかしながら、一見同じに見えている行為にも、ひょっとすると深い価値観や意味の違いがあるかもしれないのだが、それに対して盲目、あるいは興味を失っている。認知の複雑性を高めて、「違い」を紡ぎ、新しい発想をするということも SWY プログラムの一つの価値である。教育者も同様である。自分の PO が Minimization であれば生徒も Minimization どりである。教育者も自分が信じていること以上の教育はできないし、それは他に影響する。
- ◇ 三つ目の Minimization の弱点は、下船後、応用ができないことである。このプログラムに参加する善意の塊のような外

国参加青年はかなり日本びいきの青年が多い。「私たち日本人」をわかってくれようとする。このような日本人青年に対して優しい環境は一般的には日本国外（あるいは船外）にはないと思ったほうが良い。日本のことを一生懸命知ろうとしたり、日本参加青年のやりたい方法でやってくれた外国参加青年は一般世界よりも多いはずである。日本参加青年は今後、日本文化や日本人に興味がない人たちが集まった環境で、乗船中と同じだけのパフォーマンスをあげられるだろうか？

このように、一見平和な、落ち着いたような状況に見える Minimization は多くの人が留まりたくなる場所である為に非常に危険な場所である。この点をよく認識して「国際交流」を行わないと、参加者の意識は一般的には Minimization どまりになるのは必至である。世界船が単なる共通の趣味や目的を持った人を見つける以上のミッション、さらには、下船後もその経験が直接生かせるようなプログラムになるには、違いを紡ぐ理論やストラテジーを全参加者に伝え、船の中で意図的に実践できるような仕掛けが必要なのではないだろうか。